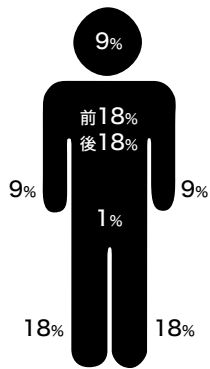


「やけど」



西城市民病院 外科医師
武田 晋平



1 やけどの広や
広範囲(全身体面積の20%以上)になると大量の体液(リンパ液)が漏れ出て、放置すると生命に関わります。すぐに119番通報をして、流水で冷しながら救急車を待ちます。小さな子どもや老人は、比較的小さな「やけど」でも命に関わることもあるので注意します。面積の目安は図を参考にしてみてください。

ストーブなどの暖房器具による「やけど」が増えてくる時季になりました。何よりも予防が一番大切ですが、ささいな油断で起こってしまうのが「やけど」です。そこで、今回は「やけど」についてお話しします。暖房器具の安全な使用を心がけ、「やけど」のない暖かい冬をお過ごしください。

2 やけどの深や

① 一番浅い「やけど」
日焼けと同じで皮膚が赤くなりひりひりと痛みますが、水ぶくれ(水泡)はできません。このような場合には、よく冷やしておくだけで、ほとんどの病院に行かなくても自然に治ります。

② 中くらいの深さの「やけど」
中ぐらいの深さの「やけど」は、水ぶくれができるのが特徴です。水ぶくれは、「やけど」の傷口を保護する役割があるので破いてはいけません。すぐに水で冷やした後、ガーゼやタオルで覆って水ぶくれが破れないように気をつけて、できるだけ早く医療機関を受診するようにします。

③ 最も深い「やけど」
最も深い「やけど」は、水ぶくれにならずに、皮膚が真っ白になったり、黒く焦げたりしてしまいます。「やけど」がここまで深くなると、かえって痛みを感じなくなります。このような「やけど」は痛みがないからといって安心せず、必ず医療機関を受診しましょう。

④ 煙にも注意
火事などで煙を吸ったときは、気

管や肺が傷ついている可能性があります。はじめは喉の痛みなどを感じるだけであつたものが、数十分後には焼けただれた気管粘膜が腫れてきて、気道閉塞を起こし、窒息死することもあります。

大したことがないと思つても、鼻毛が焦げていたり、鼻の中にススが付着を認める、喉に痛みを感じる場合は、救急車で医療機関に行く必要があります。

3 自分で出来る応急処置

「やけど」は、すぐに水で冷やすことが大切です。「やけど」を冷やすと、痛みが軽くなるだけではなく、悪化することを防ぐこともできます。まずは「やけど」の部分の簡単に脱げる衣服を脱がせます。ストッキングやズボン、靴下など患部に張り付いた状態の物は、無理に脱がさずに、着たままで流水(水道水)にさらして冷やします。流水が無理な場合には濡れたタオルでも構いません。広範囲の「やけど」や乳幼児や老人では体温が下がり過ぎることもありますので注意が必要です。受傷直後に患部に、アロエや、市販の軟膏などを塗布するのは、逆に創を汚染させるだけです。おやめください。消毒も必要ありません。できるだけ水ぶくれは破らないようにし、

4 低温やけど

医療機関を受診してください。

特殊な「やけど」に低温やけどがあります。ちよつと触つたくらいでは「やけど」の原因にならないようなものが長時間接触することによって起こります。カイロ、コタツ、ホットカーペット、最近のエコブームで人気の湯たんぽなどが原因となります。接触部の温度が44℃だと約6~10時間で受傷すると言われて、います。受傷者側の原因としては、熟睡していたり体が不自由であったり、知覚麻痺、泥酔、糖尿病による循環不良などの状態にあると受傷しやすいとされています。最初は大きなことがないように見えても日が経つにつれ、皮膚が黒く変色し、死んでしまう(壊死する)ことが多いのが特徴です。ですから、できるだけ早く医療機関を受診してください。予防としては、カイロは肌直接接触たらないようにする、こたつやカーペットの温度設定を低くする、寝る前にはスイッチを切るようにすること。湯たんぽも直接足に触れない所に置く、もしくはタオルでくるむだけでは危険ですから、しっかりと袋に入れて、寝ている間にむき出しにならないような工夫が必要です。